

### 第3回京田辺市学校教育審議会 議事録（要旨）

会議名	第3回京田辺市学校教育審議会
日時	令和3年10月21日（木）午後5時30分から午後7時
場所	京田辺市役所 3階305会議室
内容	1 開会 2 会長あいさつ 3 議事 (1) 答申（骨子案）について 4 その他 5 閉会
出席者	（委員） 沖田会長、河村副会長、井脇委員、宮谷委員、鈴木委員、尾谷委員、柳澤委員、安井委員、岡田委員、奥西委員、岩井委員 （市教育委員会）山岡教育長 （事務局）藤本教育部長、中井教育指導監、鈴木教育部副部長、北尾教育総務室担当課長、片山こども・学校サポート室総括指導主事、村中こども・学校サポート室指導主事、鳴海こども・学校サポート室指導主事、藤井学校教育課長、吉村教育総務室企画係長
傍聴者	2人

#### ●議事（要旨）

##### (1) 答申（骨子案）について

《事務局から資料に基づき説明》

【委員】学校段階間の切れ目ない支援という視点が学校にとっては極めて重要と考えるが、骨子案ではどう読み取ればいいのか。新たにコーディネートする人を配置する中で、その人が果たす役割になるのかもしれないが。また、支援計画の作成だけではなく支援計画を作成し、それを実施し、例えば、改善したり引き継いでいく、そういった視点というのは極めて大事になるのではないかと。

【会長】学校間の連携は重要なファクターとなるので連携をコーディネートする人員の配置も必要となると思う。

【委員】児童生徒への支援は学校がするというイメージではないように書かれてあると思うが、これは何か新たな人材を活用したイメージなのか。

【会長】学校を中心として、どういう支援体制を構築するかという議論である。

【委員】骨子案では、学校が行うというように読み取れるところもあるのでは。

【会長】学校を中心として、学校の機能を拡充するためにこれを支えるような人員配置であるとか、そういうものが必要であるという議論をこれまで行ってきた。

【委員】学校では大変だから他で行うということか。

【会長】そうではない。大変だから誰かに任すのではなく、先生方を中心に、不登校の子供達にどう指導していくか、そこを考えようという議論。決して先生は忙しいから他に任すという、そういう議論ではない。

【委員】現状では担任を中心に放課後等の家庭訪問による支援を行っているが、教員の負担増となっている。単に訪問するだけではなくて、学習支援を行うとなると新たに教材の準備や訪問指導することになり時間もかかる。

【会長】不登校児童の面談等でも、訪問して家庭訪問することは重要だが、今、タブレットも活用できるのではないか。また、保護者とも夜の時間帯に相談を受ける、そういう方法もある。アウトリーチについても訪問だけに限定するのではなく、多様な方法を考え出すということも課題である。

【委員】各学校にコーディネーターを配置し、そのコーディネーターが支援計画や配置される外部人材とかの活用を行う役割を担って充実を図っていく、ということか。

【会長】学校間の連携も重要であり、学校間で取り組んでいる、いない、また、内容が全く違っているということではだめなのでコーディネーターが各学校間の連携を取りながら対応していくという風になると考えられる。

【委員】外部人材というのはどういう人材か。

【会長】例えば、退職した先生、経験豊かな先生等があてはまるかなと思うが、特別支援の子供に対しては資格を持った方であるとか、いろいろな活用の仕方があると思う。

【事務局】現在、コーディネーターという役割として学校に配置はされている。その中でコーディネーターが校内の不登校も含めた支援対策を実施しているというのが現状。各学校に配置、あるいは派遣される外部人材、これはスクールカウンセラーであるとか、まなび生活アドバイザー等であるとかを有機的に結合させながらいかに不登校に対応していくか、というところで行われている。ただし、現状ではひとつの学校の中でのコーディネートという事になっており各校で偏りがないように全体としてネットワークを構築しながら全ての学校で不登校対策をさらに進めていくという認識である。

【委員】骨子案にあるコーディネーターについては、基本的には素晴らしいと思う。ただ、具体的にどういう機能として動いたらいいのか。各学校では既にコーディネーターの方もおられ、校内的にはそれぞれ動いていると思う。そこを全市的に格差がないようにするため、全市のコーディネートのチームのようなイメージで考えており、たくさん的人数はいらないと思うが、アウトリーチとなると相性があり、保護者は経験豊富な退職された校長先生が良かったり、一方、子供達は歳に近いお姉さんやお兄さんとお話しがしやすかったりもする。チームとして多角的な要素を持った方が数名居るイメージを持っている。

【会長】コーディネーターの連携とはまさにそういうこと。ひとつの中学校で起こった事象は他校においては解決に向けたアイデアになることもある。コーディネーターの連携はやはり重要になってくると思う。これまでも配置されているが、ひとつの学校の問題に一生懸命やって悩むこともあったと思うが、そういう意味ではコーディネーターの先生方にとっても豊かな経験の交流というのはいいのではないか。

【委員】今、学校にいるコーディネーターはそのままとし、そこを繋ぐような機能がコーディネーターとして、心理であるとか教育の知識があつてある程度最新の援助のトレーニングをしているさまざまな年齢層の方がおられればいいのかなど。

【委員】現在、学校でコーディネートしているのは教育相談部の部長かなと思う。

これとは別に新たなポストとしてコーディネーターを配置するということか。

【会長】 現在、尽力していただいている方とは別にということではなく、そういう方が上手く機能できるような形をどう構築していくかという議論である。また、提案であるが、ICTを活用した相談という選択肢もあると思う。いつでも先生やコーディネーターと繋がれる、という体制も重要ではないか。

次にポットラックの機能拡充についてはいかがか。駅に近いところで便利ではあるが、非常に狭い。新聞を見ると非常に不登校児童生徒が増えていると、文科省が発表している中でこのポットラックの機能、駅に近いというだけであそこに置いていいのかという点も考えて行かなければならない。

【委員】 立地やスペースの問題で子供達の選択の幅が狭まっているのであれば是非解消していただければ。新たな場所という考え方や、2か所目ということも考えられるのでは。

【会長】 中・長期的な取り組みと書かれているが当然考えていかなければならない。これについても、答申に加えなければならぬのではと思う。

【委員】 こういった施設は市内に1か所しかないのか。

【事務局】 過去の経緯では公民館等で中学校ブロックごとに部屋を借りて実施したという時期もあるが現在は1か所で実施している。

【委員】 少ないと思う。

【委員】 自分のペースで過ごすという機能が必要な段階と、少人数で活動ができるという段階のふたつがあると思う。これを設置していただけるとより充実した形になるのかなど。また、通室する際、小学生であれば保護者の送迎が必要になる。保護者が送迎できない時の支援をどうするかという点も考えなければいけない。

【会長】 保護者が不在のときの対応は重要である。マイクロバスを活用するという方法もあるのかなと思うが。

【委員】 バスに乗れる位元気な子供であればいいが、家から出られないという場合は、慎重に対する必要がある。指導員の方に送迎してもらうのが可能であれ

ばいいのかなと思うが。

【会長】ポットラックの指導員が送迎に携わるということ。人員の配置が関係することであるが。

【委員】不登校の子供はできれば保護者に見届けていただくのが大事だが、対応できない日に保護者の支援というところでカバーできるといいなと思う。

【会長】保護者の支援というと。

【委員】仕事の都合で送迎できない時に、サポートできればいいと思う。指導員がされるのか先程のコーディネーターの方がされるのか、新たな機能を持った方がもし配置されるなら、ポットラックの支援も視野に入れていただいてもいいかもしれない。

【会長】この場は、できるかできないかの判断をする場ではないので、意見をいただければ。

【委員】ファミリーサポートという方法あるのではないか。こういったサービスとつながることで安心感は生まれると思う。

【会長】ひとつの提案である。次に、幼児や小学校低学年の児童に対する早期からの相談体制の構築、幼稚園から小学校、小学校から中学校といった学校間の連携した指導体制をどう確立していくかという問題である。

【事務局】学校における相談体制は、まず子供の様子をきっちりと幼・小連携、小・中連携という形をつないでいくという教師側の動きと、それから保護者等については学校に配置されているカウンセラーときっちりとつないでいくという形の相談体制が作られている。幼児や低学年の児童に対する早期からの相談体制というところであるが、学校や園で実施されてはいるが、ポットラックの専門のカウンセラー等がいるのではないかという意見もある。

【会長】カウンセラーの方々の連携機能をどう構築していくかは大きな課題である。次に学習支援についてはどうか。

【委員】子供達は基本的に学びたいという感情がある。学習の支援を柱として立

てられるのは基本的に賛成だが、(4)の位置づけが他の(1)とか(3)とどういう関係で捉えたらいいのか。学校に登校できない児童生徒の学習機会を学校における支援のさらなる充実の枠でみるのか、ポットラックとしてみるのか、そうではなくて別のところで何かしら支援、学習の機会を提供する場が他にも必要だ、という風にみるのか。その見方によって中身的な取り組み、イメージ等は変わってくるかなと思う。同じくICTのところも同様である。

**【会長】**学校では手に負えないからどこかに委ねるということではない。学校が中心となり、学校の機能をどう広げていくかという視点が重要である。子供達に小または中学校の課程を学べる機会をどう与えていくか、そういう議論である。GIGAスクール構想による1人1台端末の整備状況を踏まえてICTを活用した学習機会の提供に向けた検討とあるが、授業をオンデマンドで子供達に見させたらどうかという話をポットラックの指導員の方にとすると、授業に対して非常に拒否反応を持つ子供もいると指摘があった。ただ、現在、いろいろなプログラムがあり中学校1年生の英語の課程をプログラムしたような教材もある。ただ、大枠としてはやはり学校教育の現場の先生方の計画とか指導とか方向性を踏まえた上でなければ進学の見込みが取れなくなってしまうおそれがあり、そういう意味では学校機能の拡充、中心としてこういう不登校の子供達の教育をどう保証していくか、その基本的な方向性は外してはいけない。

**【委員】**これらの支援を充実させたり機能を拡充させたりする事がどこに向かっていくかというキーワードが欲しい。バラバラで(1)、(2)、(3)、(4)を行うのではなく、学校だけの再登校とか学校復帰だけが目標ではなく、社会的な自立というものに向けてこれらの支援を充実させていくために学習機会が必要なのだ、というような捉えをどこかで明示する必要があるのではないか。

**【会長】**子供達がやがて学校に行けるだろうというような方向ではなく、この不登校の子供達に学習の機会を与えるということは一体どういう意味を持つのかということをしつかり認識するということか。社会的な自立それと並行して進学の見込みを与えられるような、そういう機能を持たせることも重要だと。

**【委員】**不登校児童生徒への支援のニーズは学校現場としては極めて強い。それだけが中心ではないが、今、不登校児童生徒が自宅でパソコン等を使って学校の教育の目標を達成できるような中身であれば出席日数にカウントしていける時代になっている。その為の指導要録の見直しも進んでいる現状を考えた

時にこれは中・長期的な取り組みなのかという疑問はある。

【委員】方向性としては実施していくことと考えるが、肖像権や個人情報の問題があり、課題を解決しながらICTの活用をしていく必要があるのでは。そのことで将来的に社会的自立を果たすために大きな材料となると思うのでそれを活用しながら、取り組んでいくことが大事だと思う。

【会長】基本的には自分でコンピューターを使える子供が増えている中で自分で学ぶ意欲を引き出すという意味でも、これを使うというのは非常に有効な方法だと思う。だから、今、ICTを活用した相談活動、学習機能も合わせていくと、そのための整備というか体制をどう作っていくか、これも重要な答申のファクターだと思います。

【委員】ICTで不登校児童生徒の学習を保証するというのは、他の子供達がICTで学習機会を確保するというのとは少し違うところがある。学校へ行けてない子供は所々知識の習得ができていないところもあり、頓挫してしまう可能性が高い。

【会長】どうすればいいと思われませんか。

【委員】不登校の子供たちは自分から声を発せないところもあり大人のサポートが必要な点もある。ICTを配備したからといって、できるかというところがある。

【会長】特別に作成されたプログラムもある。子供達ひとりひとりに別個に先生が付く必要あるとなると難しいところもあるが、多様な方法を探りながら議論しており、ICTだけで指導するという意味ではない。学習機会を保証するという意味で有効な方法であろうという議論のひとつである。

【委員】確かに教材も進んでいるが、そこに不登校の子供が乗っていけるかというと、そこは丁寧な指導が必要だと感じる。

【会長】不登校の要因の程度に応じてある者は学校の授業をオンデマンドで聞けるし、ある人はICTも使えるし、ある人は本当に対面で指導する、いろんな可能性があるという議論と考える。ICTはだめだと言ってしまうのではなく、そういう方法も検討していくということで。

【委員】ICTがだめという意味ではない。不登校の子供達個々の目線で考えていただけるといいと思う。

【会長】不登校の子供達に対応する場合に単に学習機会だけではなく、社会的自立という方向も踏まえた上で指導していくというのは答申に反映すべきだと、また、付帯意見として、例えばICTだけではだめだと、もっと子供の目線で、どのレベルで学習ができているのかという事を見極めた上で、それに応じて対応するということが必要だということ。その点を付帯意見として反映させていく。また、主旨の中に記載済みとしてのご意見で、もう少しこれを強化したらいいというものとして、例えば先程からの議論の中でコーディネーターの配置等の問題、これも強化していく、どういう人をコーディネーターとして依頼するのか、どういった形の連携が必要であるのか、そういうこともこの答申には反映しませんが、コーディネーターの強化、連携の方法等もここに十分強めていくということであると、だいたいこの3つくらいの方角で整理をしたいと思う。

【委員】カウンセラーという方で元私は不登校でしたよ、っていう方の採用というのは今まであるのですか。自身の不登校の経験を子供達に話せるという人がおられたら、親近感がわいて心を開けるのではないかと。

【会長】おられると思います。高校時代に不登校で大学入学資格試験受けて大学に来られて教師になった方もいる。不登校で人生が終わってしまうのではなく、さまざまな可能性があるということを知るといことは、社会的な自立の大きな一歩ですね。

(以上)